OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『石清水物語』における男主人公の心理と物語の論理
Author(s)	井, 真弓
Citation	詞林. 2001, 30, p. 11-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67473
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『石清水物語』における男主人公の心理と物語の論理

井　真弓

はじめに

『石清水物語』は、宝治元（一二四七）年以後、文永八（一二七一）年以前までの二十四年間（鎌倉時代中期）に成立したと考えられる王朝物語（以下、鎌倉時代物語と称す）である。鎌倉時代物語は、『源氏物語』を始めとする先行作品の人物造型や場面、表現を模倣踏襲していることから、しばしば擬古物語と称され、作者の想像力の枯渇や作り物語の限界と見なされている。結果として現在では平安期の王朝物語の亜流として扱われ、その作品意義が認められていない。しかし、『石清水物語』には、平安期の物語には見られないいくつかの特色、例えば主人公に武士を採用している点、男色や兄妹恋愛譚を物語内に織り込み、恋愛と出家とを関連付けている点などが見られ、独特の様相を呈している。本論では『石清水物語』における男主人公たる伊予守の「出家」及び、その理由を考える上で「罪の意識」に着目して考察する。

一　罪が起こりうる状況設定

本物語は、木幡の姫君を巡って姫君の異母兄である秋の中納言と、武士である伊予守の叶わぬ恋愛模様を描出した作品である。二人の男性にはそれぞれ血縁、身分差という障壁が設けられ、各々の恋愛には禁忌が付随するような話型が本文中に明示されている。まず、秋の中納言と木幡の姫君の恋愛を検証してみると、その話型は、

（伊予守）「はらからなりとも、いはけなくより添ひ慣らはしたることなくて、今初めて見つけたらんが、なほよそ人と思ひて、しみかへりなん心は、あるまじき仲と聞きなすとも、さりとてひたみちに、心清くはなり変はらじをと推し量らるるには、この（＝木幡の姫君）御ありさまの、見る人（＝秋の中納言）ただなるまじきに、後ろめたきなるべし、『うつほ』の絵を参らせたまへるも、ことしもあれ」と思ひあはせられて、「仲澄の侍従に思ひよそ

へたまふにや」と心の内に案ぜらるるも、（四五頁）

のように『宇津保物語』の仲澄と貴宮の兄妹恋愛譚、あるいは、

（秋の中納言が）言ひわたりたまひし春のことよりうちはじめ、ありのままに（木幡の尼君は）語り聞かすれば、（伊予守）「あやしうも踏みまよひたまへる緒絶の橋かな」とほほ笑みたる、（四四頁）

に示される、『源氏物語』の柏木と玉鬘の恋愛譚を連想させる本文記述を指摘することが可能である。[1] 秋の中納言は、木幡の里において偶然にも姫君を垣間見、恋情を抱くのだが、寸前のところで異母妹であることが判明し、衝撃を受ける。このような物語展開から、『宇津保物語』『源氏物語』に見られる、妹に対する恋愛の不成就とそれに伴う悲劇的な結末（『宇津保物語』の仲澄の場合は悶死）が想起される。本物語においては、

・（秋の中納言）「などて今しばし、確かに（素性を）知られで、大殿の君達など思はせたらましかば、あり始めなんには力なく、言ふかひなくてこそはあらめ」などおぼすぞ、いとうたてある御心なるや。（三一～三二頁）

・（秋の中納言）「常陸が娘と思ひしままにて、明らむることなからましかば、後には聞き出づるとも、言ふかひなくてありそめけんことは、誰も咎あらざらまし」など、心の内におぼゆるも、我ながらうたて、後ろめたき兄人心なりかし。（四八頁）

のように、秋の中納言が己の恋情を満たすがため、異母妹と契りを結ぶという禁忌を犯す可能性が幾たびもほのめかされ、さらには、

（秋の中納言）「昔今にためしなきにもあらず、関守強き道ならねば、さすが心やすかりなんを、いかにせまし」と忍びがたくて、ひたふる心もすすみ出づれど、またうち返し思ふには、いとうたておぼえて、（八三頁）

と、男が禁忌を犯して二条后と関係を持つ『伊勢物語』五段「人知れぬわが通ひ路の関守は宵々ごとにうちも寝ななむ」をも踏まえることにより、禁忌を犯す行為の正当化まで行っている。このような状況設定にも拘わらず、秋の中納言は結局その禁忌を乗り越える事ができず、その後も木幡の姫君への尽きせぬ想いを引きずり続けることとなるのである。この様な物語構造は、常識的、保守的であり、主人公である伊予守の行動を引き立てる効果をもたらしている。

次に伊予守について考えてみよう。木幡の姫君と伊予守とは、当初姉弟として養育されていたが、姫君が左大臣の娘として引き取られ、入内が正式に決定した時点より、二人の恋愛には身分が決定的な差異となり、そればかりか「帝の御妻（候補）をあやまつ」という罪の問題が浮上してくる。しかし、伊予守は秋の中納言とは異なり、

（伊予守）「同じくは、我（＝伊予守）も人（＝木幡の姫君）

も身をなきにして、いかなる野山にも率て隠しきこえなば、誰も言ふかひなくて、憂き名を流し、いかなる罪にあたるとも、我（＝伊予守）がためには、しばしにても（木幡の姫君に）うち添ひたてまつりて、死なん命はさらにいたみあるまじ。この世一つの思ひ出では、取る方ありぬべし。ひたすらに心一つを砕きわびて、暗き道にさへまどはんよりも、なかなかひたみちに（木幡の姫君を）盗み隠して、共に憂きためしにや、言ひ伝へられまし。男の子の習ひは、后の宮を取り隠して、命に替ふるためしなくやはある。（後略）」など、猛き筋に思ひなさるる折々もあれど、（六五頁）

のように、『伊勢物語』六段における二条后を盗み出した在原業平や石清水八幡神の神託[2]をよりどころとして私通という禁忌を犯し、姫君と契りを結ぶに至るのである。

ここで着目したいのは、伊予守は私通という罪を犯したにも拘わらず、後に述べるように物語の中では結局、その罪の追及はなされずに回避されている点である。このように物語内に生じた罪が隠蔽された背景には、どのような物語の論理が介在するのだろうか。以下、登場人物の人物造型や物語展開を中心に考えてみたい。

二　罪を回避するべく造型された登場人物

伊予守と木幡の姫君の恋愛については、早くより『源氏物語』の柏木・女三宮物語との影響関係が指摘されており[3]、物語展開や表現に至るまで著しい類似が見られるが、双方の最大の相違は密通・私通の露顕の有無であり、特に罪の追及者の有無が物語の結末を大きく左右しているように思われる。

『石清水物語』では、関白の夢想により姫君の私通が暴露される。関白は息子である秋の中納言を疑いつつ、入内を取り消し、中務宮の後妻として嫁がせるが、やがて帝が略奪という形で、姫君を迎え取る次第となっており、伊予守と姫君とが密やかに通じた事実は保持されている。

それに対して『源氏物語』では、密通が光源氏の知るところとなり、女三宮・柏木共に光源氏への畏怖感に耐えられず、女三宮は出家、柏木は死と、物語は悲劇で幕を閉じる。この悲劇の発端は、柏木の手紙にある。女三宮が「御茵のまよひつるつま」に手紙を挟み、「何心なく大殿籠る」ことによって光源氏に発見され[4]、またその内容も一見しただけで柏木本人がしたためた恋文と判断できる書きぶり[5]という両者の落度が密通の露顕を導き、二人を悲劇のどん底に突き落としたのであり、自業自得の結果なのである。

『石清水物語』においても伊予守は姫君宛に手紙を贈っている。手紙の形状・墨付き・文字遣いに至るまで柏木の手紙の影響を強く感じさせるものであるが、

かしこ（＝伊予守）には、まして身に魂も添はずながら

も、「いつを待つ」と慰めやらぬ心の内、書き尽くしてだに心をも慰むべきに、おのづから落ち散ることもあらば、ゆゆしきことなるべければ、ただ私にかすめ書きたるぞかひなかりける。（一一八頁）

のように、伊予守の手紙は非常に慎重な配慮の行き届いた書きぶりである。

また、この手紙を受け取る姫君も然り、女三宮とは正反対であり、手紙を取り次いだ女房をたしなめる程しっかりとしている。（上段が『石清水物語』、下段が『源氏物語』、対照すべき所に同一の線を付す。）

宮（＝中務宮）は御湯殿におはします。（弁）「よき隙」と思ひて、（伊予守の手紙を）見せきこゆれば、（木幡の姫君）「かかる物な取り出でそ。おのづから散ることもこそ」とて、御顔赤めて苦しげにおぼしたれど、（一一八頁）

御前に人しげからぬほどなれば、（小侍従は）かの（＝柏木の）文を持て参りて（中略）（女三宮）「いとうたてあることをも言ふかな」と何心もなげにのたまひて、文をひろげたるを御覧ず。（『源氏物語』若菜上　一三四～一三五頁）

つまり、『源氏物語』において、女三宮の子供っぽさやいたらなさが強調されたのは、密通露顕の一要因として機能させるためであり、逆に『石清水物語』にて木幡の姫君は登場した当初から「よろづねびととのほり、限りなき御盛り」（二五頁）、伊予守より「五ばかり上におはす」（四三頁）と設定されたのは、女三宮とは異なり、成人した女性であるため、全ての面でたしなみ深く、伊予守との秘密を外部にさらすことのない女性として造型されているからだと思われる。

以上のことにより、『石清水物語』の登場人物はしかるべき行動・態度をとる理想的人物として造型されており、その結果、物語内に用意された「罪」は露顕しにくくなっている。このことは『石清水物語』では、登場人物自らが犯した罪から生じる苦悩を描出することを主題としているのではなく、寧ろそれを意図的に回避する物語展開がなされているような印象を与える。

三　物語展開の屈折

①　罪の回避における秋の中納言の役割

前章において、『石清水物語』における登場人物は罪の露顕を回避するべく造型されていることを示したが、そればかりではなく物語自体が罪を隠蔽するために屈折して展開されていることが読み取れる。例えば、普段とは様子の異なる伊予守に接して、秋の中納言が伊予守の心中を類推する部分に着目してみたいと思う。

（A）（秋の中納言）「幼くより疎からず生ひ出でて、（木幡の姫君の）限りなきさまを（伊予守が）ほのかにも見初めて

は、男の身と生まれながら、いかなる聖なりとて、心にかからぬやうはあらじ。おほけなくあるまじきことと、我が心を戒むる苦しさは、まさるにやあらん」など、思ひ寄せられたまふに、「身のほどにあはず、めざまし」とはおぼえたまはで、「力無きこの世一つのことにはあらじ」など、思ひ許されたまふ。（七二～七三頁）

（B）（秋の中納言）「心なきにはあるまじ。（伊予守は）もとより、いたうしづまりたる所つきて、なべての若き者には違ひたりしかば、この度はこよなく屈しにける、いかならん。（木幡の姫君と）近きゆかりなれば、男の習ひは思ひ寄らんもかたかるまじ。過ぎにし頃、（姫君が）あからさまに渡りたまひにしに、いかなるまよひにかありけん、にはかに御参りの止まりにしも、心得がたしや」と案ぜられたまふ。（秋の中納言）「（伊予守が）卑しき際なりとも、我も女ならば、必ず心を通はしてん、見初めては、あはれと思ひぬべきさまなるを、もしさることあらば、古めかしき宮（＝中務宮邸）には（姫君が）こよなく思ひましだまぶらん」などまもられたまひ、あるまじきことのほども、主がらに許されて、かたはならずおぼさる。（一二五～一二六頁）

秋の中納言は、すぐさま伊予守の心痛は木幡の姫君への想いであることを想定する。（A）においては、既に姫君の入内が決定しており、姫君は関白家における唯一の后候補であることを考慮すると、伊予守の恋煩いは、関白家の栄華繁栄を破壊する「おほけなくあるまじき」行為であり、当然とがめられるべき心情であるのだが、秋の中納言は前世からの宿縁であることを理由に許容してしまう。（B）でも入内が取り消された原因を伊予守の過ちによるものであると、秋の中納言は見抜きながらも「主がら」によって黙認する。つまりこの時点において、秋の中納言が伊予守を容認するということは、すなわち、私通を許容したと認識することができるのである。

このような秋の中納言の驚くべき寛容さは一体何に起因しているのであろうか。これを木幡の姫君、秋の中納言、伊予守の三角関係、および秋の中納言と伊予守との男色行為を検証することにより解明したい。

秋の中納言は、木幡の姫君が異母妹と判明した後も、恋情を持ち続けているのだが、

・さらでも、（秋の中納言は）おのづから通ひたまふ所々あれど、いづくをさして心のとまりともなるべくもあらねば、世を経て一人のみ過ぐしたまふままに、そこはかとなく物のみあはれにおぼさるる中にも、かの妹背の山の苦しさは、なほ忍びがたくなりゆくを、「いかにおぼゆる心ぞ」と、強ひて思ひ返すにしもぞ、従はぬ心なり。（五一頁）

・中納言はかかる（＝女二宮との結婚）につけても、人知れ

ぬ心の内には、あるまじき（木幡の姫君への）思ひのみ止む世なく、苦しくなりゆくを、強ひて思ひ冷ましてのみ月日を送りたまふに、（六二頁）

などと、絶えず己の心情を抑制している。これは、異母妹との恋愛が成就できないことを自ら認識し、そして諦観しているのである。

一方、秋の中納言と伊予守との男色関係は、姫君の後見として伊予守が紹介された際、秋の中納言が一方的に伊予守を見初めたことから始まり、以後一層伊予守に耽溺する秋の中納言の姿が描出されている。その中で秋の中納言が伊予守に求めるものは、

・（秋の中納言は）け近く馴れむつれたまへど、（伊予守は）うち畏まりたるさまにまめだちたるを、（秋の中納言）「さるべきにやありけん、見初めしより深き心ざしありて、久しき絶え間などは、いと苦しうおぼゆるを、同じ心にあひ思はぬ身のほどこそ、恨めしう思ひ知らるれ」（七二頁）

などのたまへば、

・例の、（秋の中納言）「御かたはら近く」とのたまへば、今はさすが歳もきびはならねば、（伊予守は）畏まりおききこえて、さし退きなどするを、（秋の中納言）「同じ心ならず」と恨みたまふ。（一三一～一三二頁）

と、「同じ心」であった。この言葉には、相手にも自分と同じくらいに恋慕って欲しいというような恋愛感情が投影されているように思われる。東国において戦乱が勃発し、伊予守が下向した際、秋の中納言が伊予守の無事を願って寺社に祈祷させる姿と、伊予守の恋人である按察使の君が、やはり同じように伊予守のために寺社詣でをしている姿とが並列して描写[6]されていることから考えると、秋の中納言の伊予守への想いは、異性愛、つまり女性から男性への恋に近似していると言えよう。[7]特に、先にも挙げた「卑しき際なりとも、我も女ならば、必ず心を通はしてん、見初めては、あはれと思ひぬべきさまなるを、もしさることあらば、古めかしき宮（＝中務宮邸）には（姫君が）こよなく思ひましたまふらん」（一二五～一二六頁）では、自らの心情を木幡の姫君に置き換えて伊予守を見つめている点、また、本文中に絶えず「女ならば」と女性的立場からの発言[8]が見られることからも明らかである。秋の中納言にとっては、木幡の姫君も伊予守も共に愛すべき人であったのである。しかし、姫君との関係はこれ以上進展させることはできず、一方では恋人たる伊予守が姫君への恋に苦悩している。自らの恋の代替として、そして伊予守の恋愛成就を願って許容したのではないであろうか。

しかしながら、また伊予守との男色関係も、

・（伊予守は）なほ忍びがたき下燃えの煙（＝木幡の姫君への恋心）は、空に満ちぬる心地して、室の八島の嘆きのみまされば、つひに消えせぬ炎ともなりぬべきに、思ひの外に語らひたまへる人（＝秋の中納言）の御気色も、その

数ならぬ身（＝伊予守）のためは、何ばかりのいさみならねど、来ては寄り立つ真木柱に、「つゆも心や慰む」と思ふ頼みばかりには、人知れず嬉しかりけり。（五〇頁）

・（伊予守）「かばかりのけ近さもあれば、さりとも、（木幡の姫君を）思ふ心の片端をも知らせたてまつる世もや」と、猛う思ひなすも、なほうけばりたる武士の心なめり。（五二頁）

と記されているように、伊予守にとっての秋の中納言への伺候は、自らの木幡の姫君への恋情を叶えるがための一手段でしかなく、やはり伊予守への恋情も成就することはなかったのである。ここまでの秋の中納言の役割は、行方知れずとなっていた姫君を見出し、姫君と伊予守との恋愛を導くために後援すること、また伊予守の私通を容認、正当化することで意図された物語の流れを作る、ある種狂言回しと言えるであろう。

② 誤解の連鎖

このような秋の中納言による黙認のみならず、様々な人物の誤解がうまく機能することによって伊予守の犯した罪が隠蔽されている。石清水八幡神の夢想によって木幡の姫君の入内が取り消されることになった際、関白はその原因を類推し、妹への恋愛は昔にも例があるということを根拠に、姫君の私通の相手として息子である秋の中納言に疑いを向ける。しかし、関白は長年の願いであった娘の入内を断念することになったにも拘わらず、世間に漏れなかったという理由でその罪を誤解の上で容認[9]してしまうのであった。中務宮も木幡の姫君が結婚前に起こした男女の咎を不問とし、また伊予守が木幡の姫君の元に頻繁に出入りする様子を見た姫君付き女房たちは、姫君の侍女であり、乳母子である弁と心を通じているのであろうと誤解することにより、結局、伊予守の犯した私通は余人に気づかれることなく隠し通される。そして結果として、物語の冒頭の唐人の観相によって示された「女は、劣り腹にて出でものしたまふべきが、上なき位に及びたまひなん」（六頁）という、木幡の姫君が栄華を極める物語の枠組みに辻褄を合わせているのである。このように罪を設定をしながらも露顕しない物語展開は、『源氏物語』の柏木・女三宮物語のもう一つの可能性を表現したものであり、新しい物語世界を形造っているものと評価できる。

③ 罪意識の稀薄化

以上のように、伊予守の犯した罪は、秋の中納言や中務宮の容認や関白らの誤解によって表沙汰とはならなかったのだが、それでは、伊予守は自らの犯した罪をどのように捉えているのであろうか。

伊予守には、特定の人物に対する畏怖感は存在していない。本来ならば、木幡の姫君と通じたことに関して、伊予守

の罪悪感は帝に対して向けられるべきなのだが、

（伊予守）「さても、あさましきあやまちをもし出でつるかな。さばかり（木幡の姫君を）いたはしく思ひ習はしたてまつりて、並み並みならん際におぼし立たんことは、飽かずおぼえて、内裏へ参らせきこえんと、殿（＝関白）のおぼし急ぐを聞くは、いみじう嬉しくて、我があるまじき心の付きはじめにしは、ひとへに身のいたづらになるべき端と思ひとぢめてしかば、いたみならず、この（＝姫君）御ためいさぎよくて、（姫君が）雲居にも定まりたまはんを見きこえんをのみ、嬉しくかたじけなくこそ思ひたまへしに、いかにしつることぞや」と、くやしく悲しきこと限りなし。人の知るべきことならねば、御参りのとどまるべきにはあらねど、内のおぼしめさんことの、「誰に結びける帯ならん」と、便なきやうにおぼされば、「ゆゆしき傷にこそはなりたまはめ」と思ふも、いたはしく恐れ深く、我が心を返す返す戒むれど、

（一〇四～一〇五頁）

と、寧ろ後見の立場にありながら姫君に不義の汚名を負わせてしまうことへの後悔の念が強いのである。

また、木幡の姫君には私通という秘密を持ったことへの恥ずかしさこそあるが、全く反省の色は見えない。それどころか、姫君の入内が取消になった後も、逢瀬の機会が持たれたことを考え合わせると、伊予守にも木幡の姫君にも共に、帝に対する畏怖感、罪悪感は欠落しているのである。これは当時の貴族社会を鑑みるに、極めて異例なことであると言わざるを得ない。

これは、武士たる伊予守にとって、帝は全く別次元の存在であることを意味しているのではないだろうか。もし主人公が貴族で、禁忌の存在する木幡の姫君への恋愛を成就させたならば、少なからず帝への罪の意識が生じるであろうし、帝と貴族の間にできあがった強固な秩序体制の破壊という問題が浮上してくるであろう。今まで、伊予守が武士として造型されたことについて、本文と有機的に繋がる明快な解答が得られないため、「その性質は公卿的で武士特有のものが出ていない」[10]などと作者の力量不足として一蹴されてきたが、罪意識の問題により明瞭になったのではないだろうか。すなわち、本物語において帝の存在は、あくまで恋愛成就の妨げとしてのみ用意されているのであり、そこから発生する罪意識は物語論理にとっては寧ろ不要なのである。それ故に、主人公として罪意識が稀薄になり得る武士が選ばれていると考えられる。

以上のことから、伊予守の罪が意図的に隠蔽されていることは明白であるが、罪が露顕していないにも拘わらず、伊予守は木幡の姫君との私通に結末をつけ、やがて出家を実行することになるのである。

四　『石清水物語』における出家観

①　石清水八幡神の存在意義と出家の背景

それでは罪の隠蔽と伊予守の出家は一体どのような関係にあるのだろうか。今までは、伊予守の出家は恋の不如意による「悲恋遁世」と片付けられてきたが、果たしてそうなのだろうか。

『石清水物語』の伊予守は早くから道心が芽生えているのだが[11]、なかなか出家に至らない。なぜならば姫君への愛執の妄念を抱いたまま死ぬと、現世執着のために無明長夜の闇を彷徨わなくてはならないと、伊予守が考えているからである[12]。よって、満たされぬ恋心が往生の障りとなるのならば、出家をするには妄念を晴らす必要があるのである。伊予守は七日間石清水に参籠し、命を代償に姫君との逢瀬の達成を祈願する。その結果、八幡神の神託を得、尼君の見舞いに木幡へ里帰りしていた姫君を垣間見、その夜、契りを結ぶこととなる。本文では八幡神の助力を伊予守に確信させている。そして姫君をかき口説く際や三度目の逢瀬を手だてしてもらおうと弁を説得する際にも、先の石清水八幡の神託が巧みに利用されるのである。

この後、八幡神は、姫君の入内の間近な時に父関白の夢枕にて姫君の私通を告げ、入内の取り消しを求めるために登場する。入内は取り消され、急遽姫君は帝の叔父中務宮の元に嫁ぐことになる。もし、姫君の私通が露顕せず、入内していたらどのように物語は進んでいたであろうか。伊予守は姫君が関白邸に引き取られるのでさえ、どのように姫君を見申し上げようかと頭を悩ませているのであるから、もし入内してしまったならば、逢瀬の機会は完全に絶たれ、姫君と伊予守の関係は消滅してしまうだけでなく、伊予守の恋の妄念は解消せず、その為に往生や出家が妨げられたであろう。しかし、入内が中止となれば逢瀬を持つ可能性は出てくるのである。このように、八幡神は伊予守の行動を正当化し、出家や往生を遂げるのを助ける存在として機能しているのである。

伊予守は八幡神の加護により数回の逢瀬を実現し、初めは愛着も好意も抱かなかった姫君が、度重なるごとに伊予守に情をかけるようになる。例えば、伊予守の夢に木幡の姫君が登場している。一般的に恋する相手を夢に見るのは、小野小町の詠歌「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを」（『古今和歌集』巻第十二・恋歌二・五五二）とあるように、相手へ寄せる自らの恋心が強いためだと考えられている。しかし、中務宮の元へ急遽嫁いだ姫君が、全く事情を知らない伊予守の夢に泣きながら現われたことは、その夢の直前に、現実に中務宮邸で泣き伏す木幡の姫君の様子が描かれていることを踏まえると、姫君が伊予守を思っているが故に夢に現れたと解釈するのが自然であろう。そして、

・【三回目の逢瀬】（木幡の姫君）「またいかなる目を見るべ

きぞ」と、「時の間に消えも失するものにもがな」と悲しくて、例の涙にくらされたまふに、（中略）（伊予守が）世にも長らふまじきよしを、泣く泣く言ひ尽くすは、（木幡の姫君）「さこそあるまじきこと」とおぼさるれど、さすがに岩木ならぬ御身なれば、いかがつゆばかりのあはれもなからん。限りあれば、かばかりのことも、初めに過ぎておぼゆることはかたきわざなれば、憂さにも面馴れて、ありしばかり消えも入るばかりにはおぼさねど、一言のいらへもなく、心強ううちとけぬものから、さすがになつかしげなる御もてなしにぞ、（伊予守は）いとど魂もなくなりぬべき。（一一一～一一二頁）

・【伊予守、中務宮邸来訪時】厭はしき人（＝中務宮）の御目移りに、（伊予守が）若うきよらに目もあやなるかたちにて、忍びかねたる気色を、（木幡の姫君）「あはれ」と御目とまるも、我ながらうたてうおぼえて、ほかざまに見やられたまふ。（一二九～一三〇頁）

・【四回目の逢瀬】年月の隔てのほどに、（木幡の姫君は）いとどしき御さま添ひて、見初めきこえし折は、ひとへに若うあえかに、世馴れぬさまに「憂し、つらし」とおぼし入りてありしが、らうたげにてこそはおはせしか、この度はこよなく人馴れて、あくまで心にくく恥づかしげに、いとど今はあるまじきことにおぼしあきれたるものから、これを初めぬ中の衣は、さすがに見馴れぬるしにや、あはれになつかしげなる御もてなしにて、（伊予守は）心魂まどひ果てぬべき。（一三五頁）

の諸例を参照しても、中務宮邸を訪れた伊予守を見つめる姫君の視線や四回目の逢瀬における姫君の態度には、もはや以前の様な嫌悪感は見られない。

このような姫君の誠意ある優しい態度に接することで、

「（前略）心ざしはありながら、すがすがとも思ひ立たれはべらで、年月を送るに、勧められきこえぬる、（木幡の姫君は）嬉しき善知識に思ひたまふる。心よりほかに見初めきこえさせし日より、今にやすき心なく、身を責むる心のみして、あるはあるともおぼえずながら、せめて命を惜しみはべるも、今日を待ちはべりける命にやと、今は心やすくなりはべりぬる」（一三六頁）

と、「まどひ」続けた伊予守は妄念を解かれ、出家できたのである。伊予守の出家に関しては、藤岡作太郎氏[13]が「潔く思ひ切りて世を棄てたるにはあらずして、何時までも未練の心絶ちがたき風あるは（後略）」のように妄念が晴れていないという判断を示しているが、出家前に姫君からの手紙を処分する伊予守の態度や[14]

・伊予守は、かかること（＝木幡の姫君が帝に甚寵を受けていること）を聞くに、いとど思ひも寄らぬ心地すれど、もとよりかやうにこそものしたまふべかりし御身（＝木幡の姫君）の、引き違へられにし御さまは、飽かず口惜し

かりしに、思ふ本意違はずなりぬるは嬉しけれど、「いと
ど雲居に聞きなしきこえつるは、勧むる山道のしるべに
や」と心細くおぼゆるにも、あはれなりし（木幡の姫君
の）御気色は身に添ふ影にて、「この世のほかの住みかま
でも、念仏の妨げにもや」、今はよしなくぞおぼえける。
（一四一～一四二頁）

・明け果つるほどに、高雄といふ所に行き着きて、（伊予守
は）丈六の阿弥陀のおはする御前にひざまづきて、刀を
取り出でて、もとどり押し切りつるに、乳母子の衛門の
尉、「あやし」とは思ひつれども、目もくれて、前に倒れ
臥し泣きまどふ気色、たとへむ方なきを見るに、世の常
の人ならば、心弱かるべけれど、（伊予守の）何ごとも一
つ殊に猛き心は、思ひ切りにける後は、なかなか恋しき
人もなく、涼しくおぼえて、
（一四七頁）

と描出されている点などから、出家に際して伊予守にはもはや妄念が無くなっていることが明白である。彼の唯一の願いは、来世において姫君と一蓮托生する事であった。伊予守はそれを叶えるがために仏道に入り、一心不乱に修行を積むことで功徳を積み、「願ひのごとく、九品の上の品にさだま」ったのである。そして極楽往生が叶ったら、姫君を極楽へと導くという約束を果たす事を可能にしたのである。

伊予守には、恋愛を契機にして出家し、そして姫君との未完の愛を来世にて完成させるため、仏道に専念するというように、相反するものと考えられてきた恋愛と仏道とを共に肯定した態度が見られるばかりか、新しい人生が展開される来世への期待や喜びが感じられる。『石清水物語』の結末は、一般に「悲恋遁世」と表現されているが、このように一括りに評価を行うことによりその本質が見えにくく、死角になっていたところがある。

② 出家における女性の役割

一般的に恋愛は出家や往生を妨げるものとして否定的に捉えられ、「宝物集」不邪淫戒の項を参照すると、

不婬とて、女のかたへ目をもだにみやるべからずと、あまたの経の中に制しいましめられて侍るめり。女人は煩悩の源、一度も犯しつれば、五百世の間、かれにしたかひて六趣に輪廻す。又は、毒蛇はみるとも女人はみるべからず。安楽行品には、「もろ〳〵の婬女にちかづくべからず」などぞ侍るめる。（『宝物集』二〇五～二〇六頁）[19]

と、女性は男性を色欲に惑わせる罪深い存在であるとされている。

このような例として、『石清水物語』の後に成立した『とはずがたり』の中には、作者二条に対して恐ろしいほどの愛欲の炎を燃やす有明の月が登場する。一度は有明の月と契りを結ぶ作者であるが、その後は手紙も受け取らず、対面もせずといった、かたくなな態度で応じていたところ、叔父隆顕を

介して有明の月からおぞましい執念による起請文が送り届けられる。有明の月と絶交をしている間、作者は女楽事件を起こして失踪し、また隆顕は隆親と衝突して籠居するという窮地に陥るが、その原因を作者、隆顕ともに、有明の月の起請文の報い、すなわち有明の月を粗略に扱ったことへの報いであると理解している。[16] そして「などあながちに、かうしも情けなく（有明の月に）申しけむと、悔しき心地さへして、我が袂さげ露けく成り侍りしにや」（一〇〇頁）と、有明の月の妄念を自らの情けある態度によって晴らすべきであったと深く後悔をしている。ここから、愛執の念を捨てることができない男性に対しては、ただかたくなに拒絶するのではなく、女性が晴らしてやるという方向性が示されているように思われる。このような思想は、三角洋一氏[17]によって「女は男法師を問わず愛執の罪に陥れる存在であり、男どもの罪を進んで晴らしてやらねばならない」と指摘されている。

実際に愛執に束縛された男性を女性が救済する例として、真福田丸伝説と志賀寺の上人の話を挙げることができる。両話とも身分の卑しい男が高貴な女性に「おほけなき」恋心を抱き、成就し得ぬ事を絶望しているのを、女性がうまく応対することにより、男に道心を起こさせるという共通性を持っている。真福田丸伝説は、門番の子、真福田丸が長者の姫君を垣間見して以来、恋の病に陥るが、事情を聞き知った姫君は男に様々な交換条件――実は僧侶になるための教育を課してゆき、最後には亡くなる。それを契機に男は道心を起こし、一心に極楽往生を願い、後に智光という高僧になるのである。「亡者智光、かならず往生すべかりし人也、はからざるに惑ひに入りにしかば、我、方便にて、かくは誘へたる也」（四八七頁）[18]と、智光の迷妄を醒まさんための方便として、行基が長者の娘として現れたと説明し、そして結びで「仏、菩薩も、男女となりてこそ道びき給けれ」（四八七頁）と述べている。つまりこれは仏菩薩ならぬ男女に対しても互いに善知識となって、仏道に導き入れるよう求められていたことを意味するのであろう。

『俊頼髄脳』に収められる志賀寺上人の話は、京極の御息所を一目見て愛欲の念を抱いた老僧が、御息所に面会を求めたところ、御息所は快く対面し、手までも触れさせて、その愛欲を晴らす。上人は感謝感激して「この縁をもてもし思ひの如く弥陀の浄土にもうまれなば必ず導き奉らむ。又浄土にうまれ給ひたらば必ず導かせ給へ」（一七五頁）[19]と、自らの長年積んだ功徳を御息所に回向し、結縁する。つまり、上人にとって御息所の行為は、浄土へ導くに値するほどの価値を持っていたことになり、女性が男性の妄念を晴らすことの重要性が読み取れると同時に、あくまで上人側の視点によってのみ描かれており、そこに女性側の選択の余地が与えられていないことも注目に値する。御息所は、あくまでも上人に見初められたがために、救済を手に入れることができたので

あって、そこに御息所本人の意思や感情は介在していないのである。

『石清水物語』も身分違いの恋という設定、そして木幡の姫君の心ある対応により伊予守の出家が導かれている点においてこれらの説話と同類と見なすことができよう。しかし、大きな相違は、女性の心理の有無である。先に挙げた二つの説話における女性は、菩薩と捉えられて、我が身を棄て男性を救うという慈悲の精神を体現しており、そこには自らの恋愛感情は全く存在していない。『石清水物語』における姫君は、逢瀬を度重ねることによって、心情の変化が現れてくる。三度目の逢瀬では、以前までのように泣きじゃくって無反応ではなく、完全にはうち解けないが、それでも「なつかしげなる」対応をし、伊予守と和歌の贈答を行っている。また、入内取り消し後、中務宮に嫁いだ姫君は、絶えず伊予守の存在を気に掛けている。そして四度目の逢瀬では、「あはれになつかしげなる」もてなしにより、漸く伊予守の妄念は消失するのである。つまり、ただ逢瀬を持つだけでは愛執は晴れることなく、伊予守と姫君との心が通じ合ってこそ、初めて、妄執は消失したこととなるのである。すなわち、伊予守の妄念は前述の三作品のように女性の義務的な慈悲によっては晴らされることなく、相思相愛なる女性の存在を必要としていると言える。このことを女性の視点から考えると、恋に迷った男性をすべて救わなくてはならないのではなく、自らを救うべき存在の男性に愛情を与え、妄念を晴らすことによって、女性自身も救われるという結末になっており、志賀寺の上人の説話に似た構図が見て取れる。しかしながら、次節に述べるように、姫君が秋の中納言を救済していない点などを考慮すると、本作品での恋愛は、先に挙げた説話に比べて一層業が深いものとなり、そして女性の意志の反映のもとに男性の愛執は晴らされるものという本物語の独自の恋愛観、出家観が現れているように思われる。「志はありながらすがすがとも思ひ立たれはべらで、年月を送るに、勧められきこへぬる、嬉しき善知識に思ひ給ふる」（一三六頁）と、姫君が伊予守の出家を導く善知識となり、そして「君故に尋ぬる法の道なれば同じ蓮の身ともならなん」（一五一頁）と、今度は伊予守が姫君を極楽浄土へ導くための善知識となる。結語を「かの山深く入りにし人（＝伊予守）も、年々積もりて、願ひのごとく九品の上の品に定まる。同じ蓮の望みも空しからざるべけんとぞ、本には侍るめるとかや」（一五三頁）と結んでいるのは、相思相愛の二人が来世にて未完の恋を遂げたことを暗示しており、ここに、来世での安住は男女二人が共に協力して手に入れるものであることを表しているのではないだろうか。

③　秋の中納言に対する救済

妄念晴れて出家を遂げた伊予守に対して、秋の中納言は異

母妹への妄念も晴れず、伊予守のようにも出家できず、中途半端なまま俗世にとどまり続ける。それは、木幡の姫君は秋の中納言を兄として慕うばかりで、彼の恋情を全く受け入れることはなかったからである。しかし、唯一度、あまりに苦悩する兄の姿を見て、姫君は「憂き世にもあらぬ所を尋ね見てまことの道の道しるべせん」（八三頁）の詠歌を与えるが、秋の中納言は、先に挙げた志賀寺の上人のようには妄念が晴れない。寧ろ、

かかる中（＝女二宮の妊娠時）にも、人知れぬ思ひはまぎるることなく、「いかさまにしていかさまに」とのみ（秋の中納言は）泣かれたまふ。（木幡の姫君）「道しるべせん」とありし気色の忘るる折なく、身にしむばかりおぼえて、一情けなくは見えじ」とたをやぎたるものから、あるまじき心のほどは、「苦し、わびし」と思ひ入りたまへり。心深げさなど、なほ人には違ひて言はん方なく、忍びかねたる折々は、嘆きわびたる心の色見せきこえたまへど、かひなき思ひなり。（九七頁）

と、一層恋情を募らせてしまうのであった。このことからも、姫君が救済しているのは、伊予守だけと考えられる。

それでは、男色関係にあった伊予守はどうであろうか。伊予守と秋の中納言の男色場面は計三ヶ所であるが、男色を結ぶに至るいきさつには一つの共通性が存在している。本文ではまず、秋の中納言が木幡の姫君を垣間見て寝所に強引に押し入るが、異母妹であることを知り、越えられぬ禁忌の恋に身を焦がす話が語られ、入れ替わりに、常陸国から上京した伊予守が、義姉である姫君を垣間見て心惹かれ、思い悩む事が語られる。そして木幡の里で二人は邂逅し、互いに意気投合した後、最初の関係を持つ。二回目は、木幡の姫君への恋心を抑制できなくなった伊予守が、姫君の寝所に進入し胸中を吐露するが、失敗に終わった後に生じる。つまり、伊予守も秋の中納言も木幡の姫君への恋心を打ち明けることに失敗し、やり場のない気持ちでいたことが共通し、

更け行くままに、風も身にしむまで、（秋の中納言は）衾引き着せて大殿籠りぬるに、世の常の香の香にはあらで、そこはかとなく艶にもの涼しき匂ひの、さま殊によしづきて、け近きにしたがひて、いとどなつかしきさまたぐひなきに、（伊予守を）女にて見まほしくおぼさる。かれ（＝伊予守）もまた、所狭き（秋の中納言の）御匂ひの言ひ知らずなまめきて、手あたりなどのたをやかにおはするに、まづふと（木幡の姫君を）物思ひ出でられて、取り替へまほしきに、（七三頁）

を参照すると、お互いに姫君の面影を重ね合わせていることが分かる。つまり男色は同一人物を愛したことへの代償行為としても機能しているのである。これは『源氏物語』空蝉巻において光源氏が空蝉への満たされない恋情を、空蝉の弟である小君を寵愛することで慰めたことと同様であろう。

伊予守を秋の中納言が「愛染明王」に例える場面が存在する。愛染明王とは人間の愛欲を菩提心へと浄化する煩悩即菩提の本尊である。秋の中納言の口からこの言葉が発せられたのは、秋の中納言にとって伊予守は、禁忌を孕む異母妹への恋心という煩悩を一時的にしろ、消失させてくれる存在であったことを示唆していると思われる。つまり、秋の中納言が禁忌を犯すことなく済んだのは、伊予守の存在があったからではないだろうか。

結局、秋の中納言は、姫君との恋愛も、伊予守との恋愛も、どちらも成就させることはできない報われない人物として造型されている。これは、女性が必ずしも悩む男性を救済しなくてはならない存在としては捉えられていないこと、愛染明王に例えられる伊予守との関係も秋の中納言を救うことができないことを表しており、前節にて述べたような『石清水物語』独自の出家観の表れと考えられるのである。

おわりに

以上、主人公たる伊予守の「出家」及びその理由を「罪の意識」に着目し考察してきた。物語は、罪が起こりうる状況設定をしつつも、決して贖罪による出家を描出したかったわけではなかったのである。それは、登場人物の人物造型を工夫し、八幡神や秋の中納言等を利用し、強引に物語を意図する方向へと導く物語展開によって罪を隠蔽したことからも明白である。

そしてまた伊予守の出家は、従来「悲恋遁世」という枠組みの中で把握されてきたが、伊予守の心情に即した検討により、出家は現世での恋に悲嘆した結果ではなく、恋愛を契機として出家をし、木幡の姫君との未完の恋愛を来世にて完成させようとするためのものであることが示された。この出家を支えるものは、伊予守と姫君との相思相愛の関係であり、共に救済しあうことによって、来世での安住を手にすることができるのである。ここに、物語独自の恋愛観および出家観が投影されているように思われる。

『石清水物語』は、『源氏物語』を下敷きとしつつも、その実、作者の思想と嗜好が色濃く投影された独自性を有し、改めてその作品価値を問い直す必要があると同時に、鎌倉時代物語全般についても再評価の必要性を強く訴えるものである。

＊『石清水物語』の本文は、『鎌倉時代物語集成第二巻』（笠間書院）に拠り、表記は私に改めた。

注

（1）妹背山ふかき道をば尋ねずて緒絶の橋にふみまどひける

（柏木詠歌）（『源氏物語』藤袴　一九六頁）

『源氏物語』の引用は、新潮日本古典集成（新潮社）に拠る。

(2) 夢ばかり結びおきける契りゆゑ長き思ひに身をやこがさん
（石清水八幡神詠歌）（九五頁）

(3) 辻本裕成「『石清水物語』における『源氏物語』の登場人物―鎌倉時代物語論序説」（『國語國文』六八六号・一九九一年十月）

(4) 女三宮の態度に対しては、光源氏の批判のみならず、『無名草子』においても二箇所にわたって指摘がある。

・あないはけな、かかるもの（＝柏木からの恋文）を散らしたまひて、われならぬ人も見つけたらましかば、とおぼすも、（光源氏は）心劣りして、さればよ、いとむげに心にくきところなき（女三宮の）御ありさまを、うしろめたしとは見るかし、とおぼす。
（『源氏物語』若菜下　二三〇頁～二三一頁）

・かやうの人（＝女三宮）は、一筋に子めかしくおほどきたればこそらうたけれ。浅ましき文、大臣（＝光源氏）に見ゆることも、その御心のしわざぞかし。
（『無名草子』三三頁）

・浅ましきこと。（中略）女三の宮の、右衛門督の文、源氏に見えたること。
（『無名草子』五七頁）

『無名草子』の引用は、新潮日本古典集成（新潮社）に拠る。

(5) 心やすからぬ筋を書き尽くしたる言葉、いと見所ありてあはれなれど、いとかくさやかには書くべしや、あたらの人の、文をこそ思ひやりなく書きけれ、落ち散るともこそと思ひしかば、昔、かやうにこまかなるべきをりふしにも、ことそぎつつこそ書きまぎらはししか、人の深き用意は難きわざなりけりと、かの人（＝柏木）心をさへ（光源氏は）見おとしたまひつ。
（『源氏物語』若菜下　二三二～二三三頁）

(6) 大納言は、山々寺々に験ある者ども仰せて、（伊予守が）ことなく平らかにあるべきよしの祈りどもをしたまふ。（伊予守が）下らんとて、暇乞ひし折、物をいみじう心細げに思ひて、心とどめたる気色なりしが、常より殊に面影に見えて、恋しう思ひ出でられたまふままに、様々心を尽くして祈らせられける験にや、（伊予守は）つゆばかりのいたはりもなく、平らかにありけるなめり。（中略）まことや、かの村薄（＝按察使の君）、伊予が下りしままには、おぼつかなさも恋しさも、やるかたなきままに、なべての世もすさまじくおぼえて、乳母なる者の家に出でゐて、またあひ見んことを念じ、物詣で、行ひに心を入れて、朝夕これをのみ思ひくづれをれけり。
（九一～九二頁）

(7) 秋の中納言と伊予守の男色行為の意味を、長谷川政春氏は「境界・変換・話型―物語史としての『石清水物語』―」（『叢刊・日本の文学7〈境界〉からの発想―旅の文学・恋の文学―』新典社・一九八九年）において、秋の中納言から伊予守への主人公性の移行を行うものとして把握しており、また神田龍身氏は、「男色、暴力排除の世代交替―『石清水』『いはでしのぶ』『風に紅葉』―」（『物語文学、その解体―『源氏物語』『宇治十帖』以降』有精堂・一九九二年）において、同一の女を共有することによって二人の男性の間に生じる暴力を排除するものと分析するが、筆者は男色の機能性よりも純粋に恋愛感情を重視して考えたい。

(8) 大納言（＝秋の中納言）も女房の中にてうち乱れ、たはぶれごとなどのたまふついでには、「伊予守をばいかが見る。我からは、魂はさながら彼（＝伊予守）があたりにぞかけらん。我も

女ならば、いかなる后の宮なりとも、必ず心をかけなんかし。よそにての見る目はさることにて、け近き気色こそ、なほ言ふよしもなく、あはれになつかしけれ」など、常にのたまへば、（六六頁）

（9）げにも殊の外のことなれば、（関白は）ただひとへに御兄人（＝秋の中納言）を疑ひたまへり。なべて、妹と見る見るだに、しどけなきこと、昔も今も多かめるに、まして「ただの人」と思ひて見初めなんに、「夢になして止まん」とは思ふまじきを、忍び過ぐして、人聞きけしからぬ名をも流さぬは、なほありがたくおぼし許されて、（一一六～一一七頁）

（10）吉澤義則『新訂鎌倉文学史』（東京堂・一九四〇年）の他、山岸徳平「岩清水物語」（『岩波講座　日本文学』岩波書店・一九三二年）金子武雄「中世の物語概説―鎌倉時代に於ける小説―」（『日本文学講座　第三巻』改造社・一九三四年）、市古貞次『中世小説』日本文学教養講座七（至文堂・一九五一年）などにも同様の指摘がある。

（11）世の常は精進がちにて、親たちの後の世をとぶらひ、「我とても限りある命の内に、今はの夕べをのどかに待つべきのみならず。いかなる騒ぎもあらば、ただ今に限る命にてもや」と、世はかりそめにのみおぼゆれば、「来ん世にだに、いかで愁へなからん大乗善根の道に入りて、人をも利益せん」と思ひつつ、法の道を習ひさとりけり。（四六頁）

（12）かかる騒ぎ（＝東国の内乱）の中にも、（木幡の姫君を）思ふ心の苦しさは、げに稲妻の光の間にも、たゆみなく心にかかることなれば、遙けき道と思ふからに、いとど恋しさのみまさりて、「かくながら命絶えなば、妄念に引かれて、なほ無量劫の道へぞ進み行かんとすらん」と悲しくて、（九一頁）

（13）藤岡作太郎「鎌倉時代の小説（二）―石清水物語」（『鎌倉室町時代文学史』大倉書店・一九一五年）

（14）さして見苦しかるべき文はなけれど、何となく取り置きたる反故ども、破りなどするに、かの（＝木幡の姫君）みづからの御手にて、「昔をしのぶ」とありし一筆はなほ捨てがたく、隙なく取り出でて見ては慰めつるも、「ただ今ばかり」と破り捨つる名残、思ひ離るる心ながらも、立ち返りあはれなり。（一四五頁）

（15）『宝物集』の引用は、新日本古典文学大系（岩波書店）に拠る。

（16）（隆顕）「さてもいつぞや、恐ろしかりし文（＝有明の月からの起請文）を見し。我過ごさぬ事ながら、いかなるべき事にてかと、身の毛もよだちしが、いつしか御身（＝二条）といひ、身といひ、かゝる事の出来ぬるも、まめやかに報ひにやとおぼゆる。（九九頁）

『とはずがたり』の引用は新日本古典文学大系（岩波書店）に拠る。

（17）三角洋一「横川の僧都小論」（『源氏物語と天台浄土教』若草書房・一九九六年）

（18）『古本説話集』の引用は、新日本古典文学大系（岩波書店）に拠る。

（19）『俊頼髄脳』の引用は、『日本歌学大系第一巻』（風間書房）に拠る。

（いのもと・まゆみ　本学大学院博士後期課程）